

エレミヤ書12-14章「預言者の悩む祈り」

1A 主の土地で行われている悪 12

1B 悪者の栄え 1-6

2B 主の愛する相続地 7-17

2A 役に立たない誇り 13

1B 栄えの衰える例え 1-17

2B 王と王母の冠 18-27

3A 理解に苦しんでいる祈り 14

1B 日照りにさらす神 1-12

2B 偽預言者による預言 13-22

本文

エレミヤ書 12 章からですが、午前中もお話したように、12 章は 11 章の説教の続きです。主がシナイにおいてイスラエルの民と契約を結び、それにしたがってヨシヤ王は動き、エレミヤもその契約にしたがって預言していましたが、彼らの中では陰謀を企てていました。それでも偶像礼拝をするように計画を立てていたのです。そして、エレミヤ自身に対する危害が加えられようとしていました。そこでエレミヤは、悩み始めます。語れば語るほど、反対が多くなります。そこで、主の御心がどこにあるのか、その信仰が試されます。

1A 主の土地で行われている悪 12

1B 悪者の栄え 1-6

12:1 主よ。私があなたと論じても、あなたのほうが正しいのです。それでも、さばきについて、一つのことを私はあなたにお聞きしたいのです。なぜ、悪者の道は栄え、裏切りを働く者が、みな安らかなのですか。12:2 あなたは彼らを植え、彼らは根を張り、伸びて、実を結びました。あなたは、彼らの口には近いのですが、彼らの思いからは遠く離れておられます。

悪者が栄えている様子を、植物が育っている様子に形容しています。そして、「彼らの口には近いのですが、彼らの思いからは遠く離れて」というのも、ずっとエレミヤ書に語られています。口では神を敬うことを語っています。けれども心は別のことを考えています。偽り、中傷し、また陰謀を企てています。

12:3 主よ。あなたは私を知り、私を見ておられ、あなたへの私の心をためされます。どうか彼らを、ほふられる羊のように引きずり出して、虐殺の日のために取り分けてください。12:4 いつまで、この地は喪に服し、すべての畑の青草は枯れているのでしょうか。そこに住む者たちの悪のために、家畜も鳥も取り去られています。人々は、「彼は私たちの最期を見ない。」と言っているのです。

エレミヤは、悪者が栄えているのを見て、これは自分の心が試されている、神への信仰が試されていることを感じていました。そして、4 節はユダの地が荒廃している様子であります。彼らの罪のために、神がこのようにされているのですが、神は自分の最期については見ない、つまり自分の終わりは決めていないと嘯っているのです。死んだ後に、自分のしたことの申し開きをしないでよい、裁かれることはないと言っているのです。

12:5 あなたは徒歩の人たちと走っても疲れるのに、どうして騎馬の人と競走できよう。あなたは平穏な地で安心して過ごしているのに、どうしてヨルダンの密林で過ごせよう。12:6 あなたの兄弟や、父の家の者さえ、彼らさえ、あなたを裏切り、彼らさえ、あなたのあとから大声で呼ばれるのだから、彼らがあなたに親切そうに語りかけても、彼らを信じてはならない。

主は、エレミヤに優しく語りかけておられるのだと思います。「もっと大変になるのだ、しっかりしなさい。わたしはあなたを救うから。」と言われているのだと思います。そして、主は少しずつ、人の心の陰険さを彼に知らせます。本音を言ってくれるのは、兄弟や父の家の者たちです。しかし、そうでない者たちは親切そうに語りかけているのだけれども、実は悪意を持っているということを教えられます。これを知るのは辛いことです。人がどれだけ心が陰険で直らないのか、それは深いのです。

2B 主の愛する相続地 7-17

12:7 私は、私の家を捨て、私の相続地を見放し、私の心の愛するものを、敵の手中に渡した。
12:8 私の相続地は、私にとって、林の中の獅子のようだ。これは私に向かって、うなり声をあげる。それで、私はこの地を憎む。

ここの「私」は漢字になっていますが、主語は神ご自身ですから、「わたし」と平仮名で書いたほうがよいでしょう。主はイスラエルの民にカナンの地を与えられましたが、しかし究極の所有者は神のものであります。ここに、神がユダヤ人をこの地から追い出さなければならないことは、まさに二重の苦しみであることが分かります。また、自分の民を敵の手に渡さなければいけないこと。そして、ご自分の土地を手放さなければならないことです。主が、いかにご自分の体に痛みを受けながら、彼らを追い出さなければいけないかが分かるでしょう。それは、彼らの反抗のためです。8 節の獅子が吠えるように、彼らは大胆不敵に神に反抗しています。

12:9 私の相続地は、私にとって、まだらの猛禽なのか。猛禽がそれを取り巻いているではないか。さあ、すべての野の獣を集めよ。連れて来て、食べさせよ。12:10 多くの牧者が、私のぶどう畑を荒らし、私の地所を踏みつけ、私の慕う地所を、恐怖の荒野にした。12:11 それは恐怖と化し、荒れ果てて、私に向かって嘆いている。全地は荒らされてしまった。だれも心に留める者がいないのだ。

「まだらの猛禽」とありますが、その風変わりな姿のため、他の猛禽から攻撃を受けます。つまり、ここではユダの民が周囲の外国から奇異の目で見られ、攻撃するという事です。そして牧者が私のぶどう畑を荒らしているとありますが、これが神の土地において、指導者がやりたい放題しているということでもあります。

12:12 荒野にあるすべての裸の丘の上に、荒らす者が来た。主の剣が、地の果てから地の果てに至るまで食い尽くすので、すべての者には平安がない。12:13 小麦を蒔いても、いばらを刈り取り、労苦してもむだになる。あなたがたは、自分たちの収穫で恥を見よう。主の燃える怒りによって。

この「荒らす者」は、バビロンのことです。「主の剣」とあるように、それはバビロンの剣なのですが、そこに主ご自身の意志が強く表れているということです。そして、「地の果てから地の果てに至るまで」とはイスラエル全土のこと。そして、全て自分たちで育てたものが台無しになります。

12:14 「主はこう仰せられる。わたしが、わたしの民イスラエルに継がせた相続地を侵す悪い隣国の民について。見よ、わたしは彼らをその土地から引き抜き、ユダの家も彼らの中から引き抜く。12:15 しかし、彼らを引き抜いて後、わたしは再び彼らをあわれみ、彼らをそれぞれ、彼らの相続地、彼らの国に帰らせよう。12:16 彼らが、かつて、わたしの民にバアルによって誓うことを教えたように、もし彼らがわたしの民の道をよく学び、わたしの名によって、『主は生きておられる。』と誓うなら、彼らは、わたしの民のうちに建てられよう。12:17 しかし、彼らが聞かなければ、わたしはその国を根こぎにして滅ぼしてしまふ。…主の御告げ。…」

主の土地、約束の地を侵す悪い隣国とは、かつてユダにちょっかいを出してきた周囲の国々に対する神の言葉が書かれています。シリア、モアブ、アモン等の国々です(1列王 24:2)。けれどもバビロンが来たときに、これらの国々も捕らわれの民となります。この「彼ら」は、ユダの民だけでなく、そのシリア、モアブ、アモンも含まれます。エレミヤ書は、引き抜きの他に、再び植えることも預言しています(1:10)。ユダの民は七十年後に戻ることが後で預言されますが、これらの国々もバビロンが滅んだ後に戻ることができる、というものです。そして、その異邦人らがかつてイスラエルの民にバアルを教えたが、逆に、彼らがイスラエルの神の道を教わり、主を自分の神とするなら、イスラエルの民の中に建てられる、というすばらしい約束です。けれども、それをしなかったら彼らは根こぎに滅ぼされてしまいます。

このように主は、周囲の隣国がユダと同じようにバビロンに襲われることを預言されましたが、憐れみを示してください、戻してください。かつ、その時は主の民に連なる者たちになるのだという恵みを与えてくださっています。けれども、拒めば根こぎにされるわけです。そして、再びユダヤ人が主の民として神に従う時、周囲の国々が敵対するようでは平和に暮らすことはできません。その国々も主を知らなければ、真の平和は来ません。これは、伝道について言えるでしょう。

イエスを信じた者の家庭には、分裂が起こるとイエスは言われました。けれども、その家族の人々がイエス様を知るならば、真の平和な家庭がそこに与えられることでしょう。

2A 役に立たない誇り 13

これで、シナイの契約についての説教が終わります。そして 13 章には、興味深い預言から始まります。言葉ではない、実演による預言です。

1B 栄えの衰える例え 1-17

13:1 主は私にこう仰せられた。「行って、亜麻布の帯を買い、それを腰に締めよ。水に浸してはならない。」13:2 私は主のことばのとおり、帯を買って、腰に締めた。13:3 すると、私に次のような主のことばがあった。13:4 「あなたが買って腰に着けているその帯を取り、すぐ、ユーフラテス川へ行き、それをその岩の割れ目に隠せ。」13:5 そこで、主が私に命じられたように、私は行って、それをユーフラテス川のほとりに隠した。13:6 多くの日を経て、主は私に仰せられた。「すぐ、ユーフラテス川へ行き、わたしが隠せとあなたに命じたあの帯を取り出せ。」13:7 私はユーフラテス川に行って、掘り、隠した所から帯を取り出したが、なんと、その帯は腐って、何の役にも立たなくなっていた。

このように、主は実演によって預言を語られます。普通に話したのでは耳を傾けないので、注意を引かせるために実演するのです。イエス様が喩えで教えるようにされた時も同じ動機でした。「わたしが彼らにたとえて話すのは、彼らは見てはいるが見ず、聞いてはいるが聞かず、また、悟ることもしないからです。(マタイ 13:13)」

そして実際の実演についてですが、当時の服は一枚の布で出来ていました。それで帯を腰に巻いたのですが、男性は仕事など体を動かす時は、その布をもっと上にあげて帯で締めましたが、今、主が行ないなさいとエレミヤに命じられているのは、このことです。そして 1 節に「水に浸してはならない」とありますが、水に浸せばもっと早く亜麻布の帯は柔らかくなります。けれども、主は、帯を新品のままにしておきたかったようです。水に浸ければ、それだけ腐敗も早くなりますので。それからユーフラテス川に行きました。その川は、今エレミヤがいるエルサレムから約 600 キロ離れています。かなり長い道のりです。ですから、簡単に数節でこの預言について書いてありますが、実は長い年月が経っていたし、大変な旅でした。そして多くの日数が経ってから再び行かせたところ、もちろんその帯は腐っていました。

13:8 すると、私に次のような主のことばがあった。13:9 「主はこう仰せられる。わたしはユダとエルサレムの大きな誇りを腐らせる。13:10 わたしのことばを聞こうともせず、自分たちのかたくなな心のままに歩み、ほかの神々に従って、それに仕え、それを拝むこの悪い民は、何の役にも立たないこの帯のようになる。13:11 なぜなら、帯が人の腰に結びつくように、わたしは、イスラエルの全家とユダの全家をわたしに結びつけた。・・主の御告げ。・・それは、彼らがわたしの民となり、名

となり、榮譽となり、栄えとなるためだったのに、彼らがわたしに聞き従わなかったからだ。

「大きな誇り」というのは、イスラエルに神が与えられていた特権です。契約の民であること、神が臨在しておられること、礼拝があり、律法があること。そして国としても周囲の国々を従える強く、大きなものとなりました。ダビデとソロモンの時代のことです。けれども彼らはバビロンに捕え移されます。帯が腐るとするのはこのことで、ユーフラテス河畔にバビロンの町がありますが、そこまで連れて行かれるということです。そこでユダとエルサレムが誇っていた霊的、国民的尊厳が損なわれることを意味していました。こうやって、帯のように何も役に立たなくなってしまう。イエス様も同じことを言われましたね。

その理由は何か？10 節にありますね、主の言葉を聞かなくなることが一つ目。そして、心を頑なにさせていたまにしていることが二つ目。それから、自分の欲やしたいことをやっているまにしていること、偶像礼拝が三つ目です。本来なら、主の民は、主に縛られた帯のように、主のところにいることによって、榮譽が与えられるはずなのです。恵みの賜物によって、豊かな祝福を受け、主の輝きによって輝くはずなのです。しかし、主の民がこれらのことを怠ると、役に立たない帯のようになるということです。イエス様も同じことを言われました。「あなたがたは、地の塩です。もし塩が塩けをなくしたら、何によって塩けをつけるのでしょうか。もう何の役にも立たず、外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけです。(マタイ 5:13)」

13:12 あなたは彼らにこのことばを伝えよ。『イスラエルの神、主は、こう仰せられる。すべてのつぼには酒が満たされる。』彼らはあなたに、『すべてのつぼに酒が満たされることくらい、私たちは知りぬいていないだろうか。』と言うが、13:13 あなたは彼らに言え。『主はこう仰せられる。見よ。わたしは、この国の全住民、ダビデの王座に着いている王たち、祭司、預言者、およびエルサレムの全住民をすっかり酔わせ、13:14 彼らを互いにぶつけ合わせて砕く。父も子ももどもに。…主の御告げ。…わたしは容赦せず、惜しまず、あわれまないで、彼らを滅ぼしてしまおう。』

また別の実演をしました。「全てのつぼに酒が満たされる」というのは、カナの婚礼ことを思い出していただくと良いのですが、酒を入れるためのつぼがあります。そこに酒を満すことは当たり前のことです。だから、ユダの人々は「そんなこと知らないとも思っているのか。」と反応しているのです。そしてその反応を使って、その壺にある酒というのは、神の怒りを表していることを示しました。聖書では、神の怒りと裁きを受けることを、このように酒に酔いしれる状態で表現する時があります。その怒りの衝撃をもろに受けるということです。イエス様が、私たちの罪に代わって、その怒りの杯を飲んでくださったというのが、十字架です。

そしてここで強調しているのは、「ダビデの王座」「祭司」「預言者」などという言葉です。ダビデの王座にあった栄光が取られることを意味しています。尊厳や栄光、これらのものが取られます。そして、全住民にも及びますが、そこでは「互いにぶつけ合わせて砕く。父も子ももどもに」とあり

ますね。神の裁きが始まると、互いに互いをつまずかせます。

13:15 耳を傾けて聞け。高ぶるな。主が語られたからだ。13:16 あなたがたの神、主に、栄光を帰せよ。まだ主がやみを送らないうちに、まだあなたがたの足が、暗い山でつまずかないうちに。そのとき、あなたがたが光を待ち望んでも、主はそれを死の陰に変え、暗やみとされる。

警告は続きます。耳を傾けて主にさえ聞いていれば、光の中を歩むことができるのです。自分に襲いかかっていることについて、それを他人のせいにするのでもなく、ただ主のところに来れば救われるのです。また、栄光を帰せよともあります。そうです、いろいろ起こっていることを、主からのものであると、主を自分のところに認めれば、その人は助かります。そして、こうした神の語りかけというのは、いつまでも受けられないのだよ、という警告です。

主がラザロのところに行かれる時にこう言われました。「昼間は十二時間あるでしょう。だれでも、昼間歩けば、つまずくことはありません。この世の光を見ているからです。しかし、夜歩けばつまずきます。光がその人のうちにはないからです。(ヨハネ 11:9-10)」主がラザロを通して証しを残されました。この光があるうちにわたしのところに来なさい、ということです。けれどもユダヤ人指導者はこの時機を逃しました。それでエルサレムにローマによる破壊、神からの裁きが下りました。

13:17 もし、あなたがたがこれに聞かなければ、私は隠れた所で、あなたがたの高ぶりのために泣き、涙にくれ、私の目は涙を流そう。主の群れが、とりこになるからだ。

エレミヤがまた泣いています。高ぶりに対して、彼は何もすることはできません。いや彼だけでなく、神ご自身も何もすることはできません。神はご自分の慈愛によってのみ、人を悔い改めに導かれます。高ぶりに対して、主は彼らを無理やり悔い改めさせることはできませんから、本人が自ら進んで神に立ち帰ることによってのみ、悔い改めが悔い改めになります。

2B 王と王母の冠 18-27

13:18 王と王母に告げよ。「低い座に着け。あなたがたの頭から、あなたがたの輝かしい冠が落ちたから。」

ここに「王」だけでなく「王母」も出てきています。おそらくこれは、エホヤキンが王であったときのことであると考えられます。ヨシヤの死後エホアハズが王となりましたが、エジプトの王ネコは彼を退けてエホヤキムを立てました。彼がネブカデネザルに反逆したので、後に彼はバビロンに捕え移されます。これが第一次バビロン捕囚であり、この時ダニエルも捕え移されました。そしてエホヤキムの次が、エホヤキンです。彼は王になった頃まだ18歳でした。だから母が実質的には権力を持っており、国を治めていました。彼女の名は「ネフシュタ(2列王 24:8)」です。彼の治世はたった三ヶ月です。ネブカデネザルの家来がまずエルサレムを包囲し、そしてネブカデネザル本人が

やってきて、彼を捕虜とし、神殿の財宝をことごとく取って行きました。そしてちなみに、彼の後にネブカデネザルがゼデキヤを王として立てますが、彼のときに最後の、第三次バビロン捕囚が行なわれます。エルサレムが完全に破壊されます。

そして王と王母に対する言葉は、再び「低い座につけ」です。輝かしい冠、光栄の座から降りなさい、という主の呼びかけです。

13:19 ネゲブの町々は閉ざされて、だれもあける者はいない。ユダはことごとく捕え移され、ひとり残らず捕え移される。13:20 あなたがたの目を上げ、北から来る者たちを見よ。..あなたに賜った群れ、あなたの美しい羊の群れはどこにいるのか。..13:21 あなたは彼らを最も親しい友として、自分に教えこんでいたのに。主があなたを罰するとき、あなたは何と言おうとするのか。苦痛があなたを捕えないだろうか。子を産む女のように。

「ネゲブ」はユダの南にある地域ですが、バビロンは南まで来て、完全に町々を破壊しました。そして「あなたに賜った群れ、あなたの美しい羊」とは、ユダの民のことです。王が王であるのは自分が支配する民がいるからですが、その貴重な財産をことごとく奪われることを預言しているものです。そして、ここの「彼ら」とはバビロンのことです。昔ユダは、バビロンと親しくすることによってアッシリヤに対抗しようとしていました(イザヤ 39 章)。けれども、それは自分に思い込ませていただけであり、バビロンは決して自分の友ではなかったのです。このようにして、自分が頼っていたもの、自分の栄えの誇りとしているものがみな取られてしまいます。一重に、主に聞き、主に栄光を帰していなかった、ということです。

13:22 あなたが心の中で、「なぜ、こんなことが、私の身に起こったのか。」と言うなら、それは、あなたの多くの咎のために、あなたのすそはまくられ、あなたのかかところがそこなわれたからだ。13:23 クシュ人がその皮膚を、ひょうがその斑点を、変えることができようか。もしできたら、悪に慣れたあなたがたでも、善を行なうことができるだろう。

何か大変なこと起こると、私たちは災難が来たとしか考えません。しかし主の答えは、「多くの咎のため」です。そして「裾はまくられ、踵が損なわれる」とありますが、バビロンに捕え移される時の姿でもあり、またエルサレムの尊厳が剥ぎ取られていることを表しています。高い衣服や化粧で身を包んだ高飛車な女が、このような悲惨な姿になることを言い含めています。

そして悪の性質の表現がとても重要です。クシュ人とはエチオピア人のことで、黒人です。皮膚の色を黒から白にすることはできないだろう。豹も斑点を変えることはできません。それと同じように、あなたがたは悪に慣れ親しみ、それが性質になってしまった、と神は仰っているのです。それだけ、墮落してしまっているということです。自分の努力ではどうしようもないほど、悪くなっています。ゆえに、後に新しい契約の約束がくるのです。彼らの従順ではなく、神の真実によ

て、神のほうで彼らの心に律法を置きます。つまり、御霊によって心と霊を新しくされます。「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。(2コリント 5:17)」

13:24 わたしは、彼らを、荒野の風に吹き飛ばされるわらのように散らす。13:25 これがあなたの受ける割り当て、わたしがあなたに量り与える分である。..主の御告げ。..あなたがわたしを忘れ、偽りに拠り頼んだためだ。

主はご自身との関係が豊かにある時は、潤いにある泉やほとばしる水に喩えられますが、罪がある時には干からびた骨、乾いた地、そして全く水分のない荒野の風に喩えられます。偽教師について、ペテロがこう言いました。「2ペテロ 2:17 この人たちは、水のない泉、突風に吹き払われる霧です。彼らに用意されているものは、まっ暗なやみです。」

13:26 わたしも、あなたのすそを、顔の上までまくるので、あなたの恥ずべき所が現われる。13:27 あなたの姦淫、あなたのいななき、あなたの淫行のわざ..この忌むべき行ないを、わたしは、丘の上や野原で見た。ああ。エルサレムよ。あなたはいつまでたっても、きよめられないのか。

当時の習慣で、恥ずべき行ないをした女を、公衆の面前で服を剥ぎ取って辱めることがありましたが、そのことを話しています。バビロンに捕え移されるとき、文字通り起こったでもあるし、また霊的にそうでした。彼らは、カナン人のならわしにしたがい、偶像礼拝と不品行の罪を犯していたのです。それでバビロンを通して、神が彼らの恥を露にしておられるということです。ヘブル書に、「造られたもので、神の前で隠れおおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明をするのです。(ヘブル 4:13)」とありますね、暗闇の業はこのように露にされるのです。

そして主は叫んでおられます、「ああ。エルサレムよ。あなたはいつまでたっても、きよめられないのか。」主ご自身の悲痛な叫びです。

3A 理解に苦しんでいる祈り 14

そして 14-15 章はまた新たな説教です。今日は 14 章だけを読んでいきます。

1B 日照りにさらす神 1-12

14:1 日照りのことについて、エレミヤにあった主のことば。

当時ユダの国を襲った日照りのことについてです。それが長く続いたことは、エレミヤ書だけでなく、少し前に生きていたハバククも話しています(3:17)。これはモーセが約束の地を目前としていたイスラエルに対して、すでに語っていたことでした。主に聞き従わないならば、こうこう、このような呪いが来ると語って、その中で日照りもあります。「申命記 28:23-24 またあなたの頭の上の天

は青銅となり、あなたの下の地は鉄となる。主は、あなたの地の雨をほこりとされる。それで砂ほこりが天から降って来て、ついにはあなたは根絶やしにされる。」

14:2 ユダは喪に服し、その門は打ちしおれ、地に伏して嘆き悲しみ、エルサレムは哀れな叫び声をあげる。14:3 その貴人たちは、召使を、水を汲みにやるが、彼らが水ためのほとりに来ても、水は見つからず、からの器のままで帰る。彼らは恥を見、侮られて、頭をおおう。14:4 国に秋の大雨が降らず、地面が割れたため、農夫たちも恥を見、頭をおおう。14:5 若草がないために、野の雌鹿さえ、子を産んでも捨てる。14:6 野ろばは裸の丘の上に立ち、ジャッカルのようにあえぎ、目も衰え果てる。青草がないためだ。

「水ためのほとり」とは、貯水槽のことです。イスラエルにはいろいろなところに、貯水槽の遺跡を見ることができます。降水量が少ないイスラエルでは、水を溜めることが自分たちの生存にとって死活問題なのですが、なくなっています。そして、イスラエルには二つの重要な雨があり、「秋の雨」と「春の雨」があります。秋の雨は、秋の収穫が終わった後に降る雨であり、次の作物の種を蒔くために土に湿気をもたらすものです。そして春の雨は、成長した作物が最後に実を結ぶための雨ですが、ここでは秋の雨が降らないとあります。だから地面が割れて、種を植えられない状況です。そして、野生の雌鹿は、非常に警戒心が強いです。その母鹿が子を産んで捨ててしまうほど、食べ物がないということです。ジャッカルは、廃墟と課した町に住む獣として聖書で描かれています。野性のろばがそのようになってしまう、とあります。

そして次から、エレミヤの執り成しの祈りが始まります。彼は、主が語られる、民が衰えてしまう話というのが耐えられなくなっています。もっと神の民として楽観的でいたい。だって、多くの約束を神が与えられたではないか。罪を犯したとて、神は彼らを見捨てることはないではないか、と良く見たいと願うのです。

14:7 私たちの咎が、私たちに不利な証言をしても、主よ、あなたの御名のために事をなしてください。私たちの背信ははなはだしく、私たちはあなたに罪を犯しました。14:8 イスラエルの望みである方、苦難の時の救い主よ。なぜあなたは、この国にいる在留異国人のように、また、一夜を過ごすため立ち寄った旅人のように、すげなくされるのですか。14:9 なぜ、あなたはあわてふためく人のように、また、人を救うこともできない勇士のように、されるのですか。主よ。あなたは私たちの真中におられ、私たちはあなたの御名をもって、呼ばれているのです。私たちを、置き去りにしないでください。

エレミヤの祈りは、決して悪いものではありません。むしろ、祈りとしては手本にできるようなものです。彼らの回復を祈る時に、まず神の名のゆえに事をなしてくださいと祈っています。彼らが正しいからではなく、神が彼らを選ばれたのだから、神の栄誉に関わるということです。それから、罪を犯したと、自分の責任を認めています。そして、在留異国人のように、さすらう旅人のようにしな

いくださいというのは、契約のない民、ただの人のように取り扱わないでください、ということです。そして、彼らが力を失っているけれども、本来は恵みによって強められているではないですか？最後に、主は真ん中におられると祈っています。これらの祈りはまさに、一つ一つが手本としてよいものです。神のご性質と約束に基づいて祈っています。そして罪の告白をしています。

14:10 この民について、主はこう仰せられる。「このように、彼らはさすらうことを愛し、その足を制することもしない。それで、主は彼らを喜ばず、今、彼らの咎を覚えて、その罪を罰する。」14:11 主はさらに、私に仰せられた。「この民のために幸いを祈ってはならない。14:12 彼らが断食しても、わたしは彼らの叫びを聞かない。全焼のいけにえや、穀物のささげ物をささげても、わたしはそれを受け入れない。かえって、剣とききんと疫病で、彼らをことごとく絶ち滅ぼす。」

主は祈りを聞かれていません。それは、10節に書いてあります。彼らをさすらう人のようにしないでくださいとエレミヤは祈りましたが、問題は彼らがそのことを愛していることです。彼らから罪を取り除いてくださいと祈っても、彼らがその罪を愛しているのです。神は、へりくだらない者、悔い改めない者に罪の赦しを与えることはおできになりません。そして、主はご自分の性質に逆らって、幸いも与えることはおできになりません。大事なものは従順であって、ここでいけにえを捧げられても、受け入れられないのです。

このように、非常に辛い現実があります。悔い改めない人が悔い改めないままであれば、いくらその人の幸いを願っても、決してその祈りはかなえられません。執り成しの祈りの辛いところです。

2B 偽預言者による預言 13-22

14:13 私は言った。「ああ、神、主よ。預言者たちは、『あなたがたは剣を見ず、ききんもあなたがたに起こらない。かえって、わたしはこの所でまことの平安をあなたがたに与える。』と人々に言っているではありませんか。」

偽預言者の存在です。エレミヤ書には、偽預言者とエレミヤとの対決が詳しく描かれていくことになります。その始まりです。エレミヤは苦しみました。自分は主から語られていることを語っている確信はあります。けれども、その声がなぜ他にないのか？あまりにも多くが、そうではないことを語っているではないか。しかも、主の名によって、という葛藤を彼は味わっていました。

そうです、これは「そのままのままでいいのだよ。」という偽りの教えのことです。主の御心にそって罪を悲しむのではなく、へりくだるのではなく、そのままのあなたで神はあなたに平安を与えると教えるものであります。これは、とても楽ですね。私たちは楽なほうに流れたくになります。お互いに、「これで大丈夫だよ」と確認し合うような、自分が主に立ち返っていなくても大丈夫だと言ってくれるような、そういう言葉はそのまま偽預言です。

14:14 主は私に仰せられた。「あの預言者たちは、わたしの名によって偽りを預言している。わたしは彼らを遣わしたこともなく、彼らに命じたこともなく、語ったこともない。彼らは、偽りの幻と、むなしい占いと、自分の心の偽りごとを、あなたがたに預言しているのだ。14:15 それゆえ、わたしの名によって預言はするが、わたしが遣わしたのではない預言者たち、『剣やききんがこの国に起こらない。』と言っているこの預言者たちについて、主はこう仰せられる。『剣とききんによって、その預言者たちは滅びうせる。』14:16 彼らの預言を聞いた民も、ききんと剣によってエルサレムの道ばたに投げ出され、彼らを葬る者もいなくなる。彼らも、その妻も、息子、娘もそのようになる。わたしは、彼らの上にわざわいを注ぎかける。

しばしば、「どうやって、偽預言者は偽預言を語ることができるのか？心の中はどうなっているのか？」と尋ねる人がいますが、ここに書いてあります。「心の偽りごと」であります。神の預言の言葉ではなく、自分の心にあること、その心は自分を欺くようなものでありますが、それを頼りに預言をしているために、偽預言になるのです。自分で感じたこと、自分で思ったことを、明白に語られている神の言葉に優先させることです。それでもって、神の言葉も混ぜながら語っていきます。こうやって偽りの預言となっていくのです。

そして、神の裁きは、「それは起こらない」と言っているそのことを彼らの身に降りかからせるということです。例えば、地獄はないと教えていたら、その人を地獄に送ると言われるのです。そして偽預言に従った者たちも、ここに書いてある災いを受けます。

14:17 あなたは彼らに、このことばを言え。『私の目は夜も昼も涙を流して、やむことがない。私の民の娘、おとめの打たれた傷は大きく、いやしがたい、ひどい打ち傷。14:18 野に出ると、見よ、剣で刺し殺された者たち。町にはいると、見よ、飢えて病む者たち。しかし、預言者も祭司も、地にさまよって、途方にくれている。』

罪によって受けた傷を受けたまま、人々が歩いている姿です。そうです、罪の悔い改めを説かない人は、このように罪による傷を負わせたまま歩かせるという過ちを犯しています。そして、偽預言者たちは自分たちが説いたように、幸いを得ておらず、そしてどのように対処すれば分からずに、途方にくれているのです。

14:19 あなたはユダを全く退けたのですか。あなたはシオンをきらわれたのですか。なぜ、あなたは、私たちを打って、いやされないのですか。私たちが平安を待ち望んでも、幸いはなく、癒しの時を待ち望んでも、なんと、恐怖しかありません。14:20 主よ。私たちは自分たちの悪と、先祖の咎とを知っています。ほんとうに私たちは、あなたに罪を犯しています。14:21 御名のために、私たちを退けなさい。あなたの栄光の御座をはずかしめないでください。あなたが私たちに立てられた契約を覚えて、それを破らないでください。14:22 異国のむなしい神々の中で、大雨を降らせる者がいるでしょうか。それとも、天が夕立を降らせるでしょうか。私たちの神、主よ。それは、

あなたではありませんか。私たちはあなたを待ち望みます。あなたがこれらすべてをなさるからです。

エレミヤは、必死になって執り成しています。そんなことはない、神は回復してくださるはずだ。神がユダを全く退けることはない。そしてこのようにして、私は代表して彼らの罪を告白している。神の御名のために、栄光のために、彼らを退けないでくださいと訴えています。また、神をほめたたえています、異国の空しい神々は雨を降らせることはできないが、主をあなたこそができるのです、と言っています。しかし、15章1節だけ読みましょう、主は全くその祈りを退けられます。

15:1 主は私に仰せられた。「たといモーセとサムエルがわたしの前に立っても、わたしはこの民を顧みない。彼らをわたしの前から追い出し、立ち去らせよ。

主は「モーセとサムエル」を出して来られました。二人とも、主がかつてその執り成しの祈りを聞かれた代表的な人物です。モーセの場合は、イスラエルが金の子牛を造って拝んだとき、主が、「わたしは彼らを絶ち滅ぼし、あなたを大いなる国民にする」と言われたとき、モーセの執り成しによって思い直されました(出エジプト 32章)。また、荒野でつぶやき、エジプトに帰ろうと言ったときも主は、「彼らを打って滅ぼす」と言われたのですが、モーセの執り成しでそれを取りやめられました(民数 14章)。

サムエルはどうでしょうか？彼は、ペリシテ人との戦いでイスラエルのために、叫んで祈ったら、主は救ってくださいました。けれどもイスラエルの民は、他に王を立ててくださいとサムエルに申し出ました。それが主の御心をそこなったことを民が後で気づいたとき、サムエルに自分たちのために祈ってほしいと願いました。サムエルは、「私もまた、あなたがたのために祈るのをやめて主に罪を犯すことなど、とてできない。(1サムエル 12:23)」と答えています。

この二人がたとえ祈ったとしても、わたしはこの民を顧みない、と言われていたのです。つまり、祈っている人でも、主はご自分が行なわれることを強く決めておられます。私がある時、日本で働くカルバリーチャペルの宣教師の人々がここで働きは大変だということを書いて、具体的に分かり合ってくれました。そこで私は変な励まし方をしました。「たといチャック・スミスが日本で教会を行なっても、同じ反応を受けるだろうし、困難だと思うよ。」私たちにとって、モーセやサムエルのような偉大な存在であります、チャックであっても主の御心でなければ、事は起こらないのです。

15章でエレミヤがさらに祈り求めますが、主が途中で警告されます。「もし、あなたが、卑しいことではなく、尊いことを言うなら、あなたはわたしの口のようになる。(19節)」エレミヤはこの時点であきらめたことでしょう。彼の疑問の祈りは、危機を迎えました。ここで彼はやめたに違いありません。こうやって主は私たちに、祈りの課題を与えられます。主を信頼し、その言われたままを語っていくことです。